

令和元年度第3回 京都市次代の左京まちづくり会議 摘録

【日 時】 令和2年3月10日（火） 午前10時から正午まで

【場 所】 左京区総合庁舎1階 大会議室C

【出席者】 ○委員 9名《欠席者9名》

○左京区役所 12名

【内 容】

1 開会

2 内容

（1）左京区基本計画（第3期）素案について

- ・ 事務局から説明（資料①）
- ・ 意見交換

■計画の方向性および計画推進にあたっての「まちづくりの基本姿勢・要素」について

＜委員＞ 素案の5～6ページについて、「まちづくりの基本姿勢・要素」で①～④の番号が振られているが、番号に意味はあるのか。特に意味がないならば、どの要素も同等に重要だと分かるよう、番号を付けないほうが良い。

6ページについて、それぞれの基本姿勢・要素の位置に意味はあるのか。もし各要素が循環するような意味合いがあるなら、矢印を付けたほうが良い。

＜委員＞ 「まちづくりの基本姿勢・要素」には、番号を付けてもいい。①「つながり」は左京朝カフェのように、左京区に引っ越しされた新しい住民の方や若い父母など、地域とつながる機会を求める方に役に立つものだ。②「協働」は市民参加のことだ。京都市は過去20～30年に渡り、市民参加を推進してきたが、これが様々な連携を生んでおり、市民活動を支援する考え方だ。③「左京愛」は、シティプライドやシティプロモーションのこと。市民が自分のまちのことをよく知ることによって愛着を感じ、そこで暮らすことに幸福感を抱けば、まちづくりに参加したくなる。左京区には世界遺産があり、新しい住民が多く、学生が多いまちであり、みんなでその価値を共有する必要がある。④「共生」については、左京区もグローバル化し外国籍の方も多く住んでいる。左京区は「誰一人取り残さない」という理念のもとに、この4つの流れでまちづくりを進めたいという考えだ。

＜委員＞ 左京区において産業は、左京の歴史につながるものだ。観光産業や伝統産業、宗教的文化産業等も基本計画で述べる必要がある。左京区に居住する外国人が多い中、次期計画が左京区のものだけで捉えるのではなく、グローバルな視点で産業を考えないといけない。

＜委員＞ 基本姿勢・要素の①「つながり」について、北部の方と話した時に、「入り人（いりびと）」が話題になったことがある。京都市特有の言葉かもしれないが、区別や差別になってはいけない。

＜委員＞ 「入り人」は全国の田舎や、東京でも下町や山の手地区で使われている。京都でも、中京区を中心とする都心では「入り人」が人口の95%を占めている学区も出てきている。大切なことは、若い人たちに昔と同じような思いをさせないことである。

地の方々が少なくなってきた中、新しい方々や観光客の力も借りて、地元の文化を継承してもらい、みんなで左京区のまちづくりを行って

いこうというのが、次期計画の趣旨である。「つながり」を大切にし、「協働」し「共生」する。その中心に「左京愛」を持つ。

- ＜委員＞ 京都中小企業家同友会は中小企業で構成される団体だが、中でも零細企業が多い。同友会では「地域に根差し、地域とともに歩む」という指針を策定し、今後は地域の資源を活かした新規事業や企業の育成を考えている。資源には「ヒト」と「モノ」がある。左京区は大学生が多いため、地元の会社や社長、職人のことを知ってもらい、将来左京区の企業に就職したり、左京区で起業したりするきっかけをつくる必要である。
- ＜委員＞ 事業者と学生をつなぐを大切にしたい。学生には左京区の老舗の店で買い物したり、神社で巫女のアルバイトをしたりして欲しい。そういう体験をきっかけとして、事業者も学生との関わりを増やしたい。
- ＜委員＞ 地域産業の育成に重点を置きたいと思っており、担い手や支え手の育成に奔走している。左京区は有名な土産店も多く、伝統産業を育成し、そこに若い人を巻き込むことが重要だ。地元の中小企業など様々な方と協力し、そのような場づくりや情報発信を行い、他区とは異なる産業育成を進めたい。
- ＜委員＞ 大原では後継者不足の問題がある。これまでは地区計画等の様々な手法を使い、移住者を増やす取組をしてきた。今の子どもは親の家に住まず、商売を継がない傾向にあり、その中で「入り人」が定住し、引き継ぐケースが出てきている。
- ＜委員＞ 大原では、新規住民１３人のうち１０人が他府県から入ってきている。地元の人は行政と協力しながら働きやすい場をつくるなど、工夫次第でできることもあると考えている。
- ＜委員＞ 現行計画の「自然を愛でる」は自然を守ることを強調しているが、人が住まなければ自然を守れない。北部に人が住むように働きかけてほしい。
また、左京北部山間地域自治連絡協議会を主体として、山菜等を復活させたい。同時に京都丹波高原国定公園や峰定寺、三本杉などを守らなければならない。
地域に何か事業があれば、そこが自然を守る拠点となるため、次期計画の中で取り組んでほしい。原点は、山を守ることによって川を守り、海を守る。この原則を左京区が担うべきだ。
- ＜委員＞ 左京区は日本の縮図であり、日本の未来を予見するような現行計画をつくった。今の基本計画によって、厳しい状況が少しずつ良い方向に進んでおり、新しい人たちが少しずつ左京区に入ってきているという状況にある。
人口減少が進む中で、人に仕事を与えられるようなまちをつくるモデルができれば、人が定住できる。
- ＜委員＞ 私は大学進学時に京都に来た。当時は上京区に住んでいたが、左京区に住む知人から左京区の良いところをよく聞いており、憧れていた。６年前に縁があり、「入り人」として左京区に引越した。今は大原で子どもの農業体験活動をしているが、今度は自分が刺激を受けたことをどう再現して、人に魅力を伝えることができるか考えている。
- ＜委員＞ まさに、こういう暮らし方ができるような左京区をつくるのが、次期計画の狙いである。
- ＜委員＞ 左京区にはいろんな能力を持った人が多いので、子どもたちが左京区の老人施設や医療福祉施設、産業などをもっと日常的に活用して交流するこ

とで地域振興につながる。

＜委員＞ 京都芸術センターのシンポジウムに参加したが、テーマが「老い」「ぼけ」「死」であった。豊かに幸せに暮らすことは、文化や芸術を活用して老いとぼけと死をどうとらえるかが重要だという内容で、左京区でも文化や芸術をそうした方向に活用してはどうか。死を否定しないために宗教や芸術があるというスタンスで、左京区から発信する文化をつくる。

＜委員＞ 地域で高齢者が持っているものを活かしていないのが問題である。毎年、左京区でも送り火をやっているが、11月から小麦を植え、6月に乾燥し、8月に使うことを若者は誰も知らない。これからは高齢者の力を活かし、そして終活の中でどう若者につないでいくのか、計画に落とし込めないか。

■計画の目指すところと計画の概要

＜委員＞ この素案の7ページは最も重要な部分だ。全体を貫く左京区のライフスタイルが描かれている。具体的には、1つは左京区には面白い人がいて、そうした人が受け入れられる素地があること。2つ目に、日常的に自然や文化に触れ合えること。3つ目に、生活と仕事が一体となっており、そのような働き方ができること。左京区だからこそのことだ。

修正意見して、目標1及び目標3の「5年後の姿」の表現を変えてはどうか。目標1には自然が強調されているが、中身は美化や景観など人工的な環境も含まれている。例えば「美しい環境を持続的に守り、活用した生活を楽しんでいる」と変える。また、目標3の「社会的孤立をなくし」は、「誰も社会的に孤立することなく」に変更してはどうか。

■まちづくりの目標と取組について

＜委員＞ 各項目の内容に差があり、読み手にとっては優先順位や重要性の違いと受け取れてしまう。できるだけ精査し、文字を大きくして、差がない書きぶりにする必要がある。

【防災・消防】

＜委員＞ 大原ではこの数年、災害被害を受けているが、地域住民の中には防災の認識が薄い人もいる。また、左京区には学生、特に留学生が多いが、全員が京都市民ではなく、防災の取組を受けていない人がいる。

＜委員＞ 左京区では外国人が増加し、また高齢化率も上がり、地域の防災能力が低下している認識がある。これからはもっと観光客や留学生が増えるが、それに対する新しい防災体制づくりについて、関係機関が連携していく必要がある。

＜委員＞ 災害が起こった際に一番困ったのは、避難困難者をどうやって安全に避難所へ連れて行けばいいのか、また避難困難者の情報をどう共有するかである。その時に、町内会の動き、横のつながりがとても重要である。

＜委員＞ 自然災害と自然環境は関連性があり、特に北部では強調して欲しい。

【健康長寿】

＜委員＞ 最近、高齢女性の方は京都市内に多数店舗がある健康体操教室に通っている。また、京都市全体の基本計画には、地域にアスリートが関わることで、市民の健康増進の役に立てることが言及されている。

＜委員＞ 保健協議会は、高齢者の居場所づくりとして「からだの学校」をつくり、先日、３期生 78 名が卒業した。また卒業生のために、様々な会をつくり続けている。行政にも応援していただき、一緒に居場所づくりに関わって欲しい。

＜委員＞ シニア大学など的高齢者向けの教養講座は、それぞれの地域でも行われている。

日本人の平均寿命が急速に伸びているが、その要因が分かっていない。例えば、上手な介護のやり方・され方、介護施設の利用方法などに要因があるのではないか。

【障害のあるひと】

＜委員＞ この項目を独立させること自体が、この計画の目指すところ「誰一人取り残さない」と逆行する。障害者は社会から取り残されないよう、みんなと同じような形で取り込むことを考えれば、「地域コミュニティ・安心安全」の項目に統合しても良いのではないか。

一方、「地域コミュニティ・安心安全」については、もっと精査が必要だ。「地域コミュニティ」と「安心安全」をひとつの項目に統合することに違和感もあるため、もう少し整理すべきだ。

＜区職員＞ 障害者施策は京都市でも対応部署があり、専門的な知識が必要だ。地域コミュニティだけで対応できるものではない。また、区民に広く知ってもらう意味でも、独立した項目としている。

＜委員＞ 高齢者の虐待も社会問題になりつつある。

＜委員＞ 京都市の基本計画の中では、シングルマザーがストレスを感じるケースに対して行政が積極的に入ることで、虐待問題になる前に子どもを預かるような仕組みが必要だと強く推している。

＜委員＞ 障害は個性の一つと考えており、多様性の中に障害も含まれる。また、外国人のこともかなり議論されているが、その存在は書かれていない。したがって「障害のあるひと」の項目を「多様性」として、外国人と障害者を入れてはどうか。

＜委員＞ ハンディキャップはチャレンジとも言われる。こうした概念は広がっており、左京区の最先端の取組として整理してほしい。

【その他】

＜委員＞ 地域の事業者は地域コミュニティの活性化、防犯防災等に役に立つ。地域内での経済循環、地産地消も含め、地域内で仕事を受けてお金を回すことを、計画に入れてほしい。

＜委員＞ 「経済・産業」を 13 番目の項目として入れるか、各項目で地域の事業所とどう取り組むか議論すべきだ。例えば、３ページの統計データに、事業所数等を記載しても良い。どのような事業所があるのかを記載すると、区内の事業所の活かし方も検討できる。

- (2) 令和２年度左京区区民提案・共汗型まちづくり支援事業（案）について
- ・ 事務局から説明（資料②説明）

3 閉会

以上